

スコトゥスのパリ期における形相的区別

本間 裕之

0. はじめに

こんにちは『スコトゥスの論理学』 *Logica Scoti* と呼ばれている著作は、『パリ報告』 *Reportatio Parisiensis* とほぼ同時期の著作とされ¹⁾、スコトゥスの晩年における形相的区別の学説が開陳されていると考えられる。この『スコトゥスの論理学』はこれまで Wadding-Vivès 版スコトゥス全集の第五巻に『形相性についての雑多問題集』 *Quaestiones Miscellaneae de Formalitatibus* の第一問として収められていた²⁾。ところが³⁾、Dumont の研究³⁾によって、Wadding-Vivès 版に収められている『スコトゥスの論理学』のテキストが、ところによってはスコトゥスの意図と反対に読めるほどに著しく崩壊していることが明らかにされた。Dumont のこの研究を受けて、2015年に Emery と Garrett によって『スコトゥスの論理学』の校訂が行われた⁴⁾。『スコトゥスの論理学』にお

1) Cf. Richard Cross, "Scotus's Parisian Teaching on Divine Simplicity" in *Duns Scotus à Paris. 1302-2002. Actes du colloque de Paris, 2-4 septembre 2002*, Olivier Boulnois et al. (eds.). Brepols, Turnhout, 2004, pp. 519-562; Stephen D. Dumont, "Duns Scotus's Parisian Question on the Formal Distinction", *Vivarium*, 43(1), 2005, pp. 7-62; Kent Emery, Jr. and Garrett R. Smith, "The Quaestio de Formalitatibus by John Duns Scotus, Sometimes Called the Logica Scoti", *Bulletin de Philosophie Médiévale*, 56, Brepols, Turnhout, 2014, pp. 91-152. なお Cross によれば、『パリ報告』は1302年に始まる講義の記録であるとされ、Emery と Smith は『スコトゥスの論理学』が1302年から1307年の間に位置づけられる著作であると考えている。

2) なお、第一問を除き、この問題集はすべて偽作であることがわかっている。Cf. Dumont, *op. cit.*, p. 14.

3) Dumont, *op. cit.*

4) Johannes Duns Scotus, "Quaestio de Formalitatibus, quae dicitur 'Logica Scoti'", Kent

る形相的区別を扱う研究はすでにいくつか見て取られる⁵⁾が、しかしそのどれもがテキスト校訂以前のものである。Cross は、『スコトゥスの論理学』と同様、Wadding-Vivès 版のテキストに乱れがあった『パリ報告』の写本調査を行うことで、Gelber や Adams が主張するような、オックスフォード期とバリ期とでは形相的区別の学説に大きな変化がある、という説を否定するに至った⁶⁾。さらに、新たに校訂された『スコトゥスの論理学』を通して、バリ期の形相的区別をより詳細に、より深く理解することが期待できるため、この著作も再読が要されるテキストである。

本稿では、この校訂版『スコトゥスの論理学』の分析を補助的に用いて、バリ期における形相的区別の理論がいかなるものであるのかを見極めることを目的とする⁷⁾。そのために以下の手順を踏む。第一に、『パリ報告』に基づいてバリ期の形相的区別について論じた Cross の研究を簡潔に紹介する。次いで第二に『スコトゥスの論理学』の内容を概観したのち、そこに現れる形相的区別の理論の特徴を取り上げ、『パリ報告』におけるものと比較する。最後に、それを纏めて Cross の主張に見られる不合理を修正する。この修正は一見すると極めて細かいものではあるが、形相的区別、さらには未だに謎の多い概念であると言える「形相性」の内実を明らかにし得る重要なものである。

1. 『パリ報告』における形相的区別

Cross は、神の本質とペルソナの固有性が同じものであるかどうかを探求する『パリ報告』第一巻第三十三区分の写本を分析することで、バリ期の形相的区別理論の見直しを行った。その結果、はじめにでも述べられたように、これまで有力であった Gelber や Adams のような、『レ

Emery Jr. and Garrett R. Smith (eds.), *Bulletin de Philosophie Médiévale*, 56, Brepols, Turnhout, 2014, pp. 153–182.

5) バリ期における形相的区別の学説について、特に影響力のある研究は Hester G. Gelber, *Logic and the Trinity: A Clash of Values in Scholastic Thought, 1300–1335*, Ph.D. diss., University of Wisconsin, 1974; Marilyn M. Adams, “Ockham on Identity and Distinction”, *Franciscan Studies*, 36, 1976, pp. 5–74 である。

6) Cross, op. cit.

7) 形相的区別理論の一般的な記述については本間裕之「ドゥッス・スコトゥスの形相的区別について」、『哲学』第 70 号、日本哲学会編、2019 年、pp. 250–265 を参照。

クトゥラ』や『オルディナティオ』におけるオックスフォード期⁸⁾とパリ期とでは形相的区別の学説に大きな変化がある、という説が否定されるに至った。まずは Gelber と Adams の説を概観しよう。

Gelber の主張は「スコトゥスは、オックスフォード期の著作においては神の単純性と背馳し得るようなしかたで、形相性⁹⁾間の区別（および複合）を認めていたが、パリ期にはその立場を弱め、神において複数の形相性が存在することを否定するようになった」と整理できる¹⁰⁾。他方で Adams の主張は「オックスフォード期には形相的区別は複数の縮減された存在者、すなわち形相性間の区別であると考えられていたが、パリ期には区別されるものではなく、区別そのものが縮減されたものであると考えられるようになった」と整理できる¹¹⁾。ここで縮減された存在者と呼ばれているのは、通常の実在者のように、端的な事物として、現実存在に即して存在するものではなく、その存在が他のものに依存しており、その存在に制限が加えられ、何らかの意味でしか存在していないようなものと言える¹²⁾。例えば概念のような、思考における存在者がそうである¹³⁾。他方で縮減された区別は、本節の終わりで説明されるが、あらかじめその概要を述べておけば、二つの異なる事物の間にあるような端的な区別ではなく、一つの同じ事物において見出される何らかの点での区別である。

さて、Gelber と Adams の主張に基づけば、パリ期における形相的区別に関するスコトゥスの見解の特徴として (a) 「神における複数の形相

8) ただし Gelber は『オルディナティオ』は『パリ報告』における見解を反映し、完全に発展した段階のものであると考えている。Cf. Gelber, op. cit., pp. 97, 99.

9) スコトゥスにおいて形相的区別が問題となるとき、形相性 *formalitas*、事象性 *realitas*、存在性 *entitas* は原則として同じ意味に用いられる。

10) Gelber, op. cit., p. 85; Cf. Cross, op. cit., p. 524.

11) Adams, op. cit., p. 38-39; Cf. Cross, op. cit., p. 526.

12) 管見の限りでは縮減された存在者、ないし何らかの意味での存在者についての包括的な説明は見出されないが、*Ord. I, d. 3, p. 3, q. 2, n. 531* では、表象された存在者という「何らかの点での存在者」に関して、現実存在に即さないという特徴を挙げている。これは縮減された存在者一般について妥当する特徴であると思われる。

13) Cross は、明言してはいないが、このように「形相性とは、自らの存在に関して端的な存在者に依存するような何らかの点での、ないし縮減された存在者である」と解釈していると思われる。ただし、本稿では彼のように「形相性とは縮減された存在者である」とは理解しない。彼の解釈に対する批判は本稿の第三節で行われる。

性が認められなくなった」こと、(b)「区別されるものではなく、区別そのものが縮減されたと考えられるようになった」ことという二点を取り出される。

Cross の批判はとりわけ (b) に対するものである。Cross は、形相的区別について述べられたオックスフォード期のテキストには、たしかに縮減された存在者間に、縮減ないし何らの規定も受けていない端的な区別が存在するように読み取れる箇所¹⁴⁾もあるということを指摘してはいるが、Cross は、この箇所はスコトゥスが誤解を招く表現を使っているだけで、彼の意図ではないとし、別の箇所¹⁵⁾から「スコトゥスは縮減された存在者間に、単なる制限された、ないしは縮減された区別を心に抱いていた¹⁶⁾」と結論付けている。つまり、Cross によれば、スコトゥスにおいて (b) が述べるような学説の変化はないのである。

他方で、(a) に関する Cross の立場は微妙である。ある意味では、彼自身も (a) に近い立場にコミットしているからである。彼の立場の典拠となる重要なテキストを引用しよう。

別のしかたでは、「何らかの点で」という規定が区別に関係付けられ得る。そしてその結果、[「本質とペルソナ的關係とが何らかの点で区別される」ということの] その意味は、本質と関係とは事物の本性に基づいて何らかの点で区別されるということになる。そしてその限りで [「本質と関係とが実在的に区別される」という] そのことは真である。というのも、本質と関係との区別は端的な事物と事物との区別であるが、区別が何らかの点でのものである、ということになるからである¹⁷⁾。

このテキストに基づいて、Cross は『『パリ報告』』においては、形相的区別はもはやそのように区別された存在者の縮減されたステータスを

14) Duns Scotus, *Lect.* I, d. 2, p. 2, qq. 1-4, n. 274 (Vat. XVI, p. 216). Cf. Cross, *op. cit.*, p. 530.

15) Duns Scotus, *Ord.* I, d. 2, p. 2, qq. 1-4, n. 407 (Vat. II, p. 358).

16) Cross, *op. cit.*, p. 532.

17) Duns Scotus, *Rep.* I-A, d. 33, q. 2, n. 59 (Rep. II, p. 328). [] は引用者による補足。なお、Cross は特にこの箇所の Wadding-Vivès 版のテキストとの相異を強調している。

要求することはなくなったのである¹⁸⁾」と主張する。つまり、この点に関する Cross の立場は、「神における形相的区別は、形相性と形相性との間の区別ではなく、事物と事物との区別として考えられるようになった」と纏めることができ、その意味で (a) と親近性があると言える。ただし Cross は Gelber のように、こうしたことをスコトゥスによる見解の変更や修正とは理解せず、むしろ同じ見解の発展と解釈している¹⁹⁾。

以上から、パリ期の形相的区別についての Cross の見解は以下のように纏められる。

1. 形相的区別のために、形相性が必ずしも要求されるわけではない。つまり、神の本質とペルソナの固有性との区別のように、二つの端的な事物の間にも形相的区別が認められる。これはオックスフォード期にはなかった観点である。
2. 形相的区別は、例えばソクラテスやプラトンとの間にあるような事物どうしの端的な区別ではなく、何らかの意味で縮減された区別である。これはスコトゥスがオックスフォード期から引き継いでいる観点である。

では、どのような区別が縮減されていると言われるのか。スコトゥスは、まず端的な区別が満たすべき四つの条件を述べたあとで、縮減された区別が満たすべき条件を述べる。まずその四つの条件を引用しよう。

(α) 第一の条件は、〔何らかのものとの区別は〕現実態においてあり、可能態においてのみあるのではないものに属する、ということである。質料において、可能態においてあるところのものが、そのように〔可能態においてのみある区別によって〕区別され、そしてそれは端的なしかたではない。……(β) 第二の条件は、〔区別が〕形相的な存在を有し、単なる潜在的な存在を有しているわけではないところのものに属する、ということである。例えば諸々の結果は自らの原因において潜在的なしかたであり、形相的なしかたではな

18) Cross, op. cit., p. 534.

19) Cross, op. cit., p. 528.

い。(γ) 第三の条件は、〔区別が〕（例えば中間のものにおける両極のものや混合されたものにおける混合され得るもののような）錯雑とした存在を有しているところのものに属するのではなく、むしろ現実態的な諸々の固有なものによって区別された存在を有しているところのものに属する、ということである。(δ) 第四の条件は、ただそれだけが完全な区別を充足させるものであるが、〔それは〕非同一性である。……そして、端的な非同一性を有しておらず、むしろ何らかの点での非同一性を有しているところのものが、何らかの点で区別されるのである²⁰⁾。

つまり、ある区別がこれら四つの条件を満たしている場合に、その区別は相異なる事物の間にある端的な区別であると言われる。なお、スコトゥスは明言していないが、特にαからγまでの三つの条件は、第四の条件のための必要条件であると考えられる。つまり、αからγまでが満たされて初めてδが満たされるかどうかは考慮されるようになるものと思われる。そしてこの第四の条件が満たされていない場合、つまり、同一の事物の内での区別が語られる場合に、それは縮減された区別と呼ばれるのである²¹⁾。

最後にもう一つ、Cross も触れておらず、本論にも直接の関係はないが、形相的区別の重要な特徴付けが『パリ報告』においても与えられることを指摘しておこう。それは定義による特徴付けである。

（例えば定義、あるいは定義の部分が、定義されるものの知解内容に属している、というように）一方のものが、他方のものの自体的かつ第一の知解内容に属している、というのではない場合には、すなわち、それらのいずれもが、たとえ実在的には同じものであるとしても、他方の形相的な特質において含まれていない場合には、何らかのものは形相的な同一性を有さない、と言われる²²⁾。

20) Duns Scotus, *Rep.* I-A, d. 33, q. 2, n. 60 (Rep. II, p. 328). (α) から (δ), および [] は引用者による補足。

21) Duns Scotus, *Rep.* I-A, d. 33, q. 2, n. 61; Cf. Cross, *op. cit.*, pp. 537-538.

22) Duns Scotus, *Rep.* I-A, d. 33, q. 2, n. 63 (Rep. II, p. 330). ただし底本にある *sed* は底本

『パリ報告』のこのテキストから、Jordan がオックスフォード期の著作である『レクトゥラ』のテキストをもとに形相的区別を定義した²³⁾際の定義による特徴付けを想起することは容易である。実際、そこでは、神の本質と父性とが事物としては同じであるが形相的には同じではないことを、類と種差とを例にとりつつ、以下のように述べられていた。

類の一性と種差の一性とは、単純な事物においては事物に基づいて同じであるとしても、形相的には同じではない。というのも、形相的に同じであるものとは、一方の定義の内に他方が入り込むようにして相互に関係するものだからである²⁴⁾。

こうしたことに基づいても、Cross の考えるように、オックスフォード期とパリ期とにおいて形相的区別に関する根本的なアイデアは一貫したものであったと考えることは理に適っている。

2. 『スコトゥスの論理学』について

『スコトゥスの論理学』は、形相的区別に関わる諸命題の推論関係を詳細に研究した著作である。この著作は、現在は失われている第一節に後続する部分であり、『スコトゥスの論理学』における参照から、ここでは神において肯定されたり否定されたりする様々な同一性や非同一次性、端的な区別の四つの条件等々が議論されていたと考えられる²⁵⁾。また、この著作自体、以下で述べるとおり、構成も練られているとは言い難く、また執筆されていない箇所も含むため未完成の著作であると考えられる。

この著作は大きく八つの部分に分けられる。(i) 第一に『スコトゥスの論理学』で扱われる問題について説明され、次いで(ii) (A) 「神性は父性と形相的に同じであるのではない」、(B) 「神性は父性から形相的に

の註および英訳に倣って « scilicet » と読んだ。

23) Michel J. Jordan, *Duns Scotus on the Formal Distinction*, Ph.D. diss., Rutgers University, 1984, pp. 55–56.

24) Duns Scotus, *Lect.* I, d. 2, p. 2, qq. 1–4 (Vat. XVI, p. 216). Cf. *Ord.* I, d. 2, p. 2, qq. 1–4, nn. 403, 407 (Vat. II, pp. 356, 358).

25) Cf. Kent Emery Jr. and Garrett R. Smith, op. cit., pp. 123–126.

区別される」、(C)「神性の形相性は父性の形相性から区別される」という三つの命題の推論関係が考察される。スコトゥスは(A)を真なるものとして前提し、(A)から(B)が、(B)から(C)が導かれるかどうかを検討する。(iii)その推論関係についてスコトゥスの見解が纏められたあと、(iv)形相的区別に反対する諸見解が展開される。(v)それに対して反論がなされることが予定されていたが、実際には全く執筆されなかった部分のあとには、(vi)再び形相的区別に反対する見解が連ねられる。(vii)その後、形相的区別を擁護する見解がいくつか並べられたあと、(viii)最後に一つだけ、再び形相的区別に反対する見解が置かれる。

『スコトゥスの論理学』における議論は非常に精妙かつ煩雑であるが、結論のみを取り出せば以下のように纏められる²⁶⁾。スコトゥスによれば(A)「神性は父性と形相的に同じであるのではない」から(B)「神性は父性から形相的に区別される」を導くことは可能であり、また(B)から(C)「神性の形相性は父性の形相性から区別される」という命題を導くことも可能である。ただし、その推論にはいずれも一定の条件が附されねばならず、まず(A)から(B)に関しては«*deitas est formaliter distincta a paternitate*»という命題における副詞«*formaliter*»が«*distincta*»を修飾し、区別を縮減していると受け取られる限りでのみ推論は真である²⁷⁾。また(B)から(C)の推論も同様に、「神性の形相性は父性の形相性から形相的に区別される」というように、命題において区別が「形相的に」ということによって縮減されている限りでのみ推論は真となる²⁸⁾。

『スコトゥスの論理学』における命題の推論関係を考察する上で鍵となるのが、この「区別の縮減」である。第一の命題(A)が縮減された非同源性を表示していたため、そこから帰結する命題(B)、(C)はいずれも縮減された区別を表示していない限り推論は偽となってしまう。逆に、区別が縮減されてさえいれば、「神性には父性に対する形相的な区別が属する」や「神性は父性から形相性という点で区別される」のよ

26) 『スコトゥスの論理学』の議論はDumontが詳しく纏めている。Cf. Dumont, op. cit.

27) Duns Scotus, *Logica Scoti*, nn. 5, 19 (*Logica*, pp. 155-156, 166). なお、『スコトゥスの論理学』における段落番号は、校訂版テキストの段落と対応付けて引用者が附したものである。

28) Duns Scotus, *Logica Scoti*, nn. 10, 19 (*Logica*, pp. 160-161, 166).

うな命題はどれも真なるしかたで導かれるという²⁹⁾。『スコトゥスの論理学』における、この「縮減」ということの内実は、スコトゥスが形相的の区別について語っている箇所から明らかである。重要な箇所であるので、少し長いが引用する。

劃然としたしかたで形相的に区別されたものは、縮減された存在に対する意味で充実した現実性を有しているとしても、また可能態的なしかたでの存在、潜在的な存在に対する意味での固有な現実性を有しているとしても、また錯雑とした存在や混合された存在に対する意味での純然な、ないしは純粋な現実性を有しているとしても、そしてそれらの条件に基づいてある限りで、〔形相的に区別されたものが〕端的な区別に対して要求される何らかのものを有しているとしても、しかしながら〔形相的に区別されたものには〕最終的な満たされたもの、すなわち、 a 〔神性〕と b 〔父性〕とが、本質と固有性についてではないようなしかたで、真なるしかたでかつ実在的にかつ現実的にその同じ存在するものにおいて同時にある、ということが、同じ存在するものの実在的な単純性には相反するのとなければ決してないところの a の b に対する端的な非同一性が欠けているからである³⁰⁾。

ここでは形相的区別の条件として、区別されたものが、可能態における存在ではなく現実的な存在を、潜在的な存在ではなく固有な現実性を、錯雑とした存在ではなく純粋な現実性を有しつつ、しかも端的な非同一性を欠いている、つまり数的に同じではないということが挙げられる。ことば遣いこそ微妙にことなるものの、各条件において対となっている概念を取り上げてみれば、『パリ報告』における縮減された区別が満たすべき条件と一致していることが分かる。それゆえ、第一節で取り上げた Cross の見解の 2、すなわち「形相的区別は端的な区別ではなく、何らかの意味で縮減された区別である」という点に関して、『スコトゥスの論理学』は『パリ報告』と同じ見解を採っていることが分かる。そ

29) Cf. Duns Scotus, *Logica Scoti*, n. 20 (Logica, pp. 166-167).

30) Duns Scotus, *Logica Scoti*, n. 15 (Logica, pp. 163-164). [] は引用者による補足。

れでは1, すなわち「形相的区別のために、形相性が必ずしも要求されるわけではない」という点に関してはどうだろうか。この点に関して、Crossの見解に従う限りでは、『パリ報告』と『スコトゥスの論理学』とにおいて全く同じ見解を採用しているとは言うことはできない。理由は以下のとおりである。『パリ報告』ではCrossによれば神の本質とペルソナの固有性との区別は、端的な諸事物の間にある縮減された区別であるとされる。他方で『スコトゥスの論理学』では、命題(C)で「神性の形相性は父性の形相性から〔形相的に〕区別される」と述べられている通り、スコトゥスは明らかに神の本質やペルソナの固有性を形相性として扱っているが、Crossの解釈する限りでは、形相性とは端的な事物ではなく、その存在を端的な事物に依存しているところの縮減された存在者であった。つまり、Crossの解釈に基づく限り、ほぼ同時期に書かれたものと推測されるこれら二つの著作の間で、区別に関する見解は同じでありつつも、区別されるもののステータスについては、一方の『パリ報告』では端的な事物であるとし、他方の『スコトゥスの論理学』では縮減された存在者であるとするというしかたで、それぞれの見解が相違しているように見えるという問題が生じる。これはどのように解決されるべきであろうか。

3. 形相的区別および形相性について

この問題は、実は『パリ報告』のテキストからも生じ得る。実際、以下に引用するテキストは明らかに神の本質およびペルソナの固有性を形相性とみなしている。

もし関係が本質の事象性から区別された事象性であるならば、その場合、〔関係は〕創造された事象性であるか、あるいは創造されていない事象性であるかのいずれかである。もし創造されていないならば、〔その事象性は〕本質から区別された事象性であるかぎり、単なる神的な本質である。というのもそれだけが創造されていないものだからである³¹⁾。

31) Duns Scotus, *Rep. I-A*, d. 33, q. 2, n. 55 (Rep. II, p. 327). ただし底本にある *essentia* は英訳に倣って削除して読んだ。また底本の註は同じ箇所 *realitas* を補うことを指示してい

Cross のように、形相性を縮減された存在者として理解するならば、スコトゥスの「神の本質とペルソナの固有性との間にある区別は、端的な事物と事物との縮減された区別である」という主張と「神の本質の形相性は、父性の形相性から形相的に区別される」という主張とは、「神の本質およびペルソナの固有性は端的な事物である、かつ縮減された存在者である」という矛盾を含意することになる。この困難を回避するためには、スコトゥスによって「形相性」と呼ばれている概念を、Cross とは違ったしかたで解釈する必要があるだろう。

『パリ報告』において、その解決の糸口を与えると思われるテキストは、第一節において引用した Cross が自説の根拠とする箇所直前にある。それは何らかのものの縮減された区別の二つの理解を提示する場面である。Cross はその第二の場合、すなわち縮減が区別に関わる場合のものを引用していたのであった。以下のテキストは、縮減が区別そのものではなく、区別されるものに関わる場合のものである。

第一のしかたでは、〔「本質とペルソナの関係とが何らかの点で区別される」と言われる際に、〕この「何らかの点で」という縮減する規定が事象性に関係付けられる場合である。……だが私はそのように本質と関係とが何らかの点で実在的に区別されるとは指定しない。というのも、その場合には、本質と関係との区別は、何らかの点での諸々の事象性の区別である、という意味になるが、このことは不合理だからである。というのも、本質は、形相的に無限であるがゆえに端的な事物だからである。³²⁾

確かに Cross の言うように、スコトゥスは神の本質と固有性との区別を端的な事物と事物との区別として理解しようとしている。そのために、「何らかの点で」という縮減する規定が区別されるものに関係付けられてはならないということを主張している。しかしこれは裏を返せば、このスコトゥスの主張において、形相性は縮減する規定を伴わないことも可能であるということを前提していると考えられる。縮減された

る。〔 〕は引用者による補足。

32) Duns Scotus, *Rep.* I-A, d. 33, q. 2, n. 58 (*Rep.* II, pp. 327-328).

存在が更に縮減する規定を伴うとは考え難いし、縮減する規定を伴わないことはなおさらだからである。

実際、スコトゥスにおいて形相性や事象性などのことばと、事物ということばとの使い分けはそれほど明確ではない。すでに見たとおり、『パリ報告』では端的な事物である神の本質やペルソナの固有性を形相性とも呼んでいた。また、形相的区別が語られるときによくモデルとして取り上げられるのが、類や種差の形而上学的な基盤となるものの間の区別であるが、「そこから類の概念が取られるところのもの」や「そこから種差の概念がとられるところのもの」を、スコトゥスは「事象性」や「形相性」と呼ぶこともあれば、単に「事物」と呼ぶこともある³³⁾。

こうした事情に鑑みれば、スコトゥスにおける形相性概念は Cross の考えるほど明確に事物という概念から区別されているとは考えられないと思われる。むしろ、形相性という概念は、事物という概念とある程度外延を共有しながら、特殊な意味を帯びたものと解釈するほうが自然であろう。他の論文³⁴⁾においてすでに詳細に述べているため、ここでは詳しく述べないが、その特殊な意味とは、意味論的な考察を通して見られたものである、ということである。その意味論的な考察とは、(例えば「人間は動物である」のような)ある命題を構成している(〈人間〉や〈動物〉のような)各々の概念は、事物において自らの対応者を有しており、その対応者のことを形相性として考える」ということである。そしてその各々の形相性は命題を真にするものとして働いている。この解釈に基づくならば、命題³⁵⁾に用いられている概念の、事物における対応者とし

33) それらを「事物」と呼ぶ例に関しては Duns Scotus, *Ord.* I, d. 8, p. 1, q. 3, n. 106 (Vat. IV, p. 201): « illa res, a qua accipitur genus, vere est potentialis et perfectibilis ab illa re a qua accipitur differentia » がある。他方で、それらを「事象性」と呼ぶ例に関しては枚挙に暇がないほどであるが、Duns Scotus, *Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 6, n. 188 (Vat. VII, p. 484): « Nec possunt istae duae realitates esse res et res, sicut possunt esse realitas unde accipitur genus et realitas unde accipitur differentia » のような箇所が挙げられる。特に後者の例は、文頭の « Nec » が « sicut » 節の内容にも影響を及ぼすかどうか解釈が必要なところであるが、その読み次第でここでの問題を解決するにあたって重要な位置を占める。この点に関してはさらなる研究が必要である。

34) Cf. 本間裕之, *op. cit.*

35) ただし、こうしたことが任意の命題について形相性が考えられるわけではなく、特定の命題の集合に限定されると思われる。その命題の集合は、少なくとも「人間は動物である」のような第一のしかたで自体的な命題全体を含んでいるだろう。

て命題を真にするものは、必ずしも縮減された事物である必要はなく、端的な事物であったとしても「形相性」という名が与えられてもよいのである。

Cross の理解では、形相性という概念にはただ形而上学的な要素しか含まれていない。つまり彼は形相性について、端的な事物とは異なり、存在に関して一定の制限を受けているもの、という現実存在に関する存在様式からしか考察していないのである。しかし、Jordan が形相的区別を、事物において基礎を持ちつつ知性の働きと関連するものであると強調していた³⁶⁾ことを考えると、形相的に区別されている形相性が形而上学的な要素のみで説明されるとは考えにくい。Cross に生じた困難は、この点に根ざしていると考えられる。このように形相性において、形而上学的な要素だけでなく、命題の意味論という人間の知性と関わる側面を捉えることで Cross の困難を解消することができる。

4. おわりに

本稿では、バリ期のスコトゥスの形相的区別理論を取り出すため、まず Richard Cross の主張を見た。彼は『バリ報告』の写本テキストの調査を通じて、オックスフォード期とバリ期とにおける形相的区別理論は、それまでの主要な研究が述べていたような学説の大きな修正・変化を蒙ってはならず、むしろ根本において一貫したものである、ということ を明らかにした。ただしバリ期の学説には、若干の発展的な変更点があり、それはスコトゥスはバリ期においては形相的区別のために形相性を必ずしも要求しなくなったという点である。彼は神的な本質とペルソナの固有性が端的な二つの事物として区別される、とスコトゥスが述べている箇所を典拠とし、このことを強調する。

続いて『スコトゥスの論理学』の校訂版テキストを参照し、そこにおいて神の本質とペルソナの固有性との間の区別における推論関係を、ごく簡単なしかたではあるが紹介した。そして『スコトゥスの論理学』においても、形相的区別を持つこの「縮減された」という特徴を付与する諸条件は、『バリ報告』によって与えられる諸条件と同じであること

36) Cf. Jordan, op. cit., pp. 55, 87-89, 95, 115-116, 117, etc.

を確認し、『スコトゥスの論理学』と『バリ報告』とにおける形相的区別の基本的なアイディアに変化はないことを見て取った。

その上で第三節では「形相性」を Cross のように縮減された存在者として解釈することによって生じる問題点を指摘し、その解決策として、形相性についての新たな解釈を提示した。Cross は、「形相性」という概念が、「事物」という概念とは明確に区別され、純粋に形而上学的な特徴付けのみによって説明できると考えていた。本稿ではむしろ、「形相性」という概念は、「事物」という概念と外延をある程度共有しつつ、意味論的なしかたで考察された限りでのものに付与される名称として解釈し、「形相性」を形而上学的な側面からではなく、意味論や命題、概念といった人間の知性に関わる側面からも理解する必要がある、領域横断的な概念であるということを確認した。形相性という概念を理解する際に要求されるのは、その存在が縮減されているかどうかという存在様態に関するのではなく、むしろそれが「命題を真にするもの」として働いているという点なのである。このように、形相性を形而上学的な側面からではなく、人間の知性に関わる領域にも跨っている概念であると理解することにより、「事物とも呼ばれ得る形相性が存在する」ということが明らかになり、Cross の解釈に生じた困難は解消される。こうして、形相的区別は、縮減された存在者であれ端的な事物であれ、「命題を真にするもの」と理解される限りでの形相性相互において見出される区別である。